ブラジル・サンパウロ州　日本とチリへのアボカド輸出を開始

FreshPlaza　2025年4月7日

ブラジル最大のアボカド生産州であるサンパウロ州は、高価値市場をターゲットに、チリと日本への輸出を開始した。これは、輸入基準への準拠を評価した2023年からの植物検疫上の査察の結果を受けたものである。チリは、一人当たりのアボカド消費量が世界第2位であり、注目すべきチャンスを提供している。

ジャグアリ社の生産者兼ディレクターであるリジア・カルヴァーリョ氏は、「チリの1人当たりの消費量は年間約8kgで、増加を続けている。今年は試験的な輸出だが、今後の大きな成長を期待している」と話す。

サンパウロ州農業・供給省のギリェルメ・ピアイ長官は、これらの貿易の開始が同州の果実セクターの競争力を高めると指摘した。同長官は、国際的な植物検疫基準を満たすサンパウロ州の能力と、それが地元の農業へのさらなる投資を引き付けていることを強調した。

生鮮果実の主要輸入国である日本への輸出は、航空輸送などの物流上の課題に加え、厳しい品質・安全基準など、難しさを伴うチャンスを提供している。

IEA-Apta（農業経済研究所及び州立農業技術研究所）のデータによると、サンパウロ州の2024年のアボカド生産量は22万3千トンを超え、主な産地はオウリーニョス、モギミリム、サンジョアンダボアビスタの各地域にある。国内需要は拡大しているものの、ブラジルの消費量は世界の平均を下回っている。カリフォルニア州原産のハスアボカドは、その栄養価と調理の多様性で人気を集めている。

サンパウロ州農牧保護局（CDA）は、輸出適性を確保するための認証を監督している。これには、病害虫防除の基準適合を確認するための技術的検査が含まれる。

出典：DatamarNews

（翻訳は情報の提供を目的としており、特定の企業や製品を推奨するものではありません。）

インド　マンゴー1,000トンを日本に輸出する計画

FreshPlaza　2025年4月7日

農産・加工食品輸出振興局（APEDA）とマルダ県庁（西ベンガル州）は、マルダ産のマンゴー1千トンを日本に輸出する計画を開始した。マルダで開催された会議には、生産者、輸出業者のほか、行政からサンディープ・サハ（ジャンムー・カシミール州担当）、シェイク・モンダル（西ベンガル州コルカタ支部）の両氏、デバフティ・インドラ地区統括官補、サマンタ・ライェク園芸局次長及びインド農業研究評議会中央亜熱帯園芸研究所（ICAR-CISH）から科学者のディーパク・ナヤク氏等の関係者が参加した。

サンディープ・サハ氏は「今シーズンは、他の国への輸出とは別に、日本にも焦点を当てている。ウッタルプラデーシュ州で蒸熱処理(VHT)を行って国際基準の遵守を確保した上で、約1千トンのマンゴーを日本に輸出する目標を掲げている」と述べた。

独自のマンゴー品種で知られるマルダ地域は、日本市場への参入を目指している。APEDAと地方当局は、品質基準の維持と日本の規制を遵守するための研修の実施を計画している。マルダ・マンゴー商協会のウザル・サハ会長は、「日本以外にも、イタリア、ベルギー、ドイツ、その他の国々から問い合わせがある。また、輸出に必要な証明書の迅速な入手について管轄当局と協議している」と話す。

この取組みは、マルダ地域のマンゴー輸出の評価を高め、世界の果実市場でのインドの存在感を強化する可能性がある。

出典：Millinium Post